大分県豊後大野市文化的景観保護推進事業調査報告書　概要版

緒方川流域の
水と石が織りなす農村景観

大分県豊後大野市

1 緒方川流域の文化的景観

豊後大野市は、大分県の南部に位置し、東西約 22 km、南北約 31 kmの市域は、県土の約 9.5％にあたる 603.36 ㎢の面積を占めます。本市は、平成 17 年(2005) 3 月 31 日に大野郡三重町・清川村・緒方町・朝地町・大野町・千歳村・犬飼町が合併し発足しました。市域北部にくじゅう連山、西部に阿蘇火山、南部に九州山地を置き、市域中央部にはこれらの山々から水を集める大野川が、南西から北東に向かって流れています。市域を出た大野川は、隣接する大分市を抜けて別府湾に注いでいます(図１)。

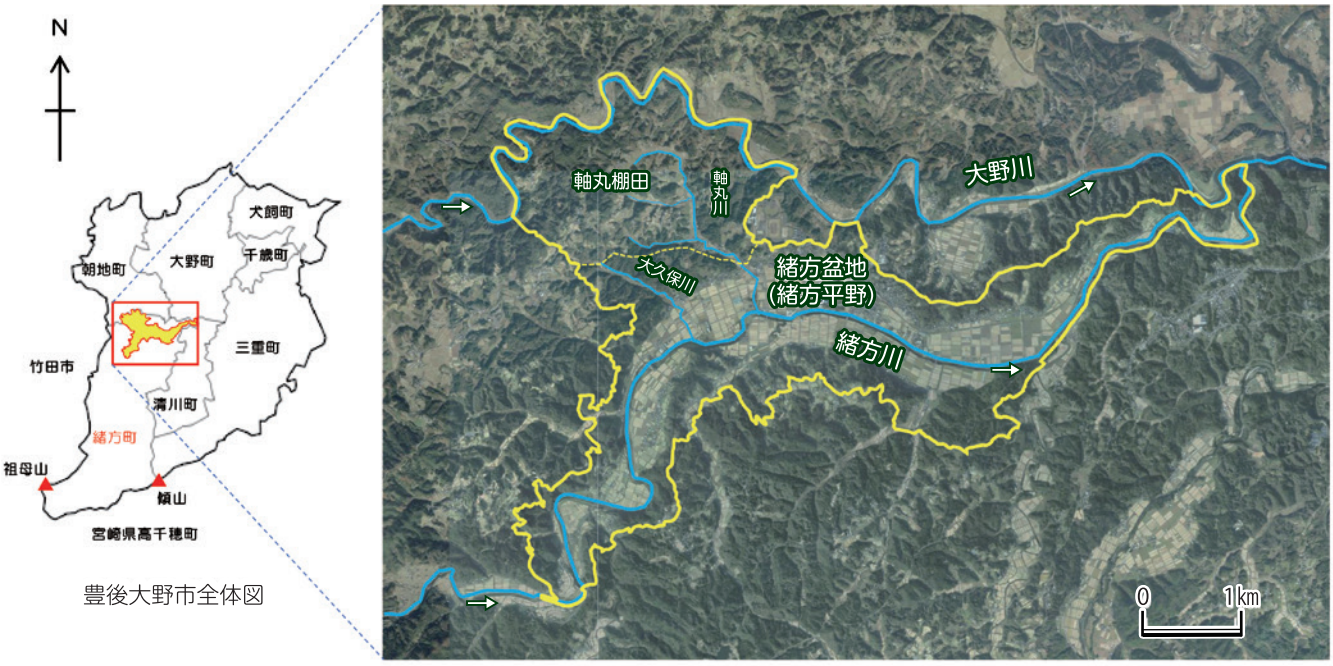
図1 九州における豊後大野市の位置図

豊後大野市の西部南半を占める緒方町は、西を大分県竹田市と南を宮崎県高千穂町と接し、この３市町にまたがって九州の屋根といわれる祖母山（標高約1,756m）がそびえています。祖母山は、火山噴火で形成された山が長い年月を経て侵食されたもので、高所部には豊かなブナ林やツガ林が広がります。南西山麓から流れ出る大野川の本流と支流の緒方川は、どちらも竹田市内を流れた後、緒方町北部を東流し、北東端で合流しています（図２)。

緒方町では、蛇行する緒方川に沿って平地が形成されており、山間部にそぐわぬ広さから、地元では「緒方平野」と呼ばれてきました。実際には丘陵で囲まれた盆地であることから、本紙では「緒方盆地」と呼びます（図２）。

盆地北側の丘陵地帯には軸丸地区があり、ここから発する軸丸川と大久保川（黒土甲川）は、南流して緒方川に注ぎ、古代から緒方盆地内の水田を潤す重要な水源地となっています。うち、軸丸川沿いには古くから棚田が形成され、近代の井路（灌漑用水路）開発によって山腹に水田が広げられました。その姿は、平成11年（1999）に「日本の棚田百選」に選ばれています。

本紙では、緒方盆地の水田と軸丸地区の棚田を中心に、その文化的景観の特徴や特性を紹介するものです。



豊後大野市全体図

図2 豊後大野市における緒方川流域の文化的景観の範囲図

2 緒方川流域の大地

1、緒方盆地の地質と地形

豊後大野市は、過去に４回発生した阿蘇火山の巨大噴火の影響を大きく受けています。特に約９万年前に発生した４回目の噴火では、火山噴出物（阿蘇４火砕流）が豊後大野市の低地まで広く埋め尽くしました（図３）。

谷間ほど火砕流が厚く積もり、高温である堆積層の内部は、その熱と圧縮により溶けた状態になります。これが冷えて固まると、薄く積もった山麓部よりも硬い岩盤の大地となります。このような岩盤には、冷えて収縮する時の亀裂が地中深くまで及び、柱状節理と呼ばれる縦方向の柱状の割れ目が発達して、崩落しやすい性質が備わります（図４）。このため、緒方盆地では、緒方川が流路を変えながら比較的軟らかい大地に３段の広い河岸段丘を発達させ、硬い岩盤部分には両岸断崖や滝を特徴とする深い谷を形成しました。原尻の滝は、この地質をよく表しています。

緒方盆地では、川の水面が段丘面よりも大きく下がり、原尻の滝よりも下流部は、特にこの差が大きくなります。その結果、緒方盆地の段丘面に水を引き稲作を行うためには、原尻の滝よりも上流に取水口を設けなければなりませんでした（図５及び図中の写真参照）。この自然条件が、緒方盆地に井路と呼ばれる長い灌漑用水路を発達させた要因の一つとなっています。

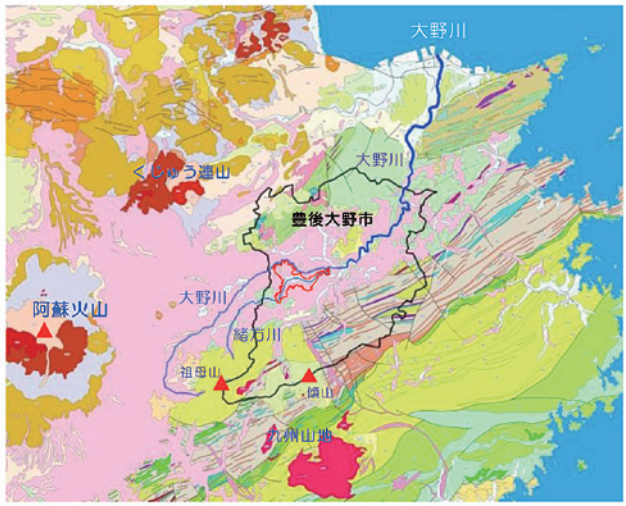
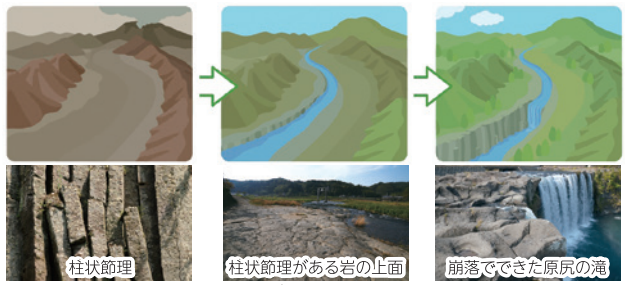


図3 阿蘇火山噴出物(ピンク色)と豊後大野市の位置図

この地質図は、下記の著作物を利用しています。



火砕流で、谷は埋め尽くされます。積もった火砕流堆積物の内部は、冷えて固まる際に収縮して、縦方向に柱状節理が入った硬い岩ができます。

谷に川が流れるようになると、火砕流堆積物の表面を徐々に削っていきます。侵食が進むと内部の硬い柱状節理の入った岩の上面が現れます。

柱状節理の入った岩は、水流の力により柱が倒れるように壊れます。そのため垂直の断崖や滝ができます。

図4 岩盤が深く侵食された川と滝の形成

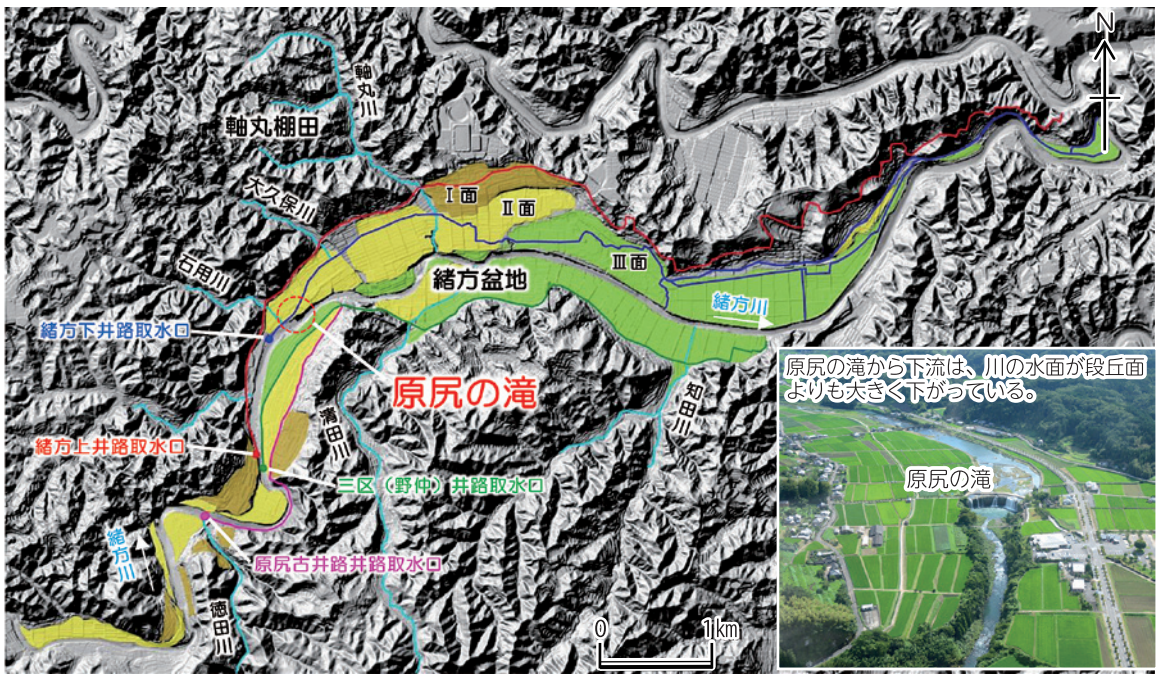


図5 緒方川沿いの段丘面区分と井路図(背景の地形図は、国土地理院地図を使用)

2、軸丸棚田の地質と地形

丘陵地である軸丸地区では、緒方盆地と比較して火砕流が厚く積もらず柔らかな火山灰土壌で覆われることになり、侵食により細かく枝分かれした谷が形成されました。軸丸地区を流れる軸丸川は３本の支流から成り、細長い谷を形成しています。ここでは古くから水田が営まれました。この細長い谷の両斜面には、長年の侵食により緩やかな凹地が数多く形成されています。凹地の山際では、所々の湧水地が「イノコ」と呼ばれて共同の水源とされ、上水道が整備されるまで人々の生活を支えていました。そして、大正３年(1914)に大野川上流域から尾根筋に沿いながら富士緒井路が開削されていたことで、畑地とされていた凹地は水田とされ、古くからの谷筋の棚田と合わせて見事な棚田が形成されています（図６）。

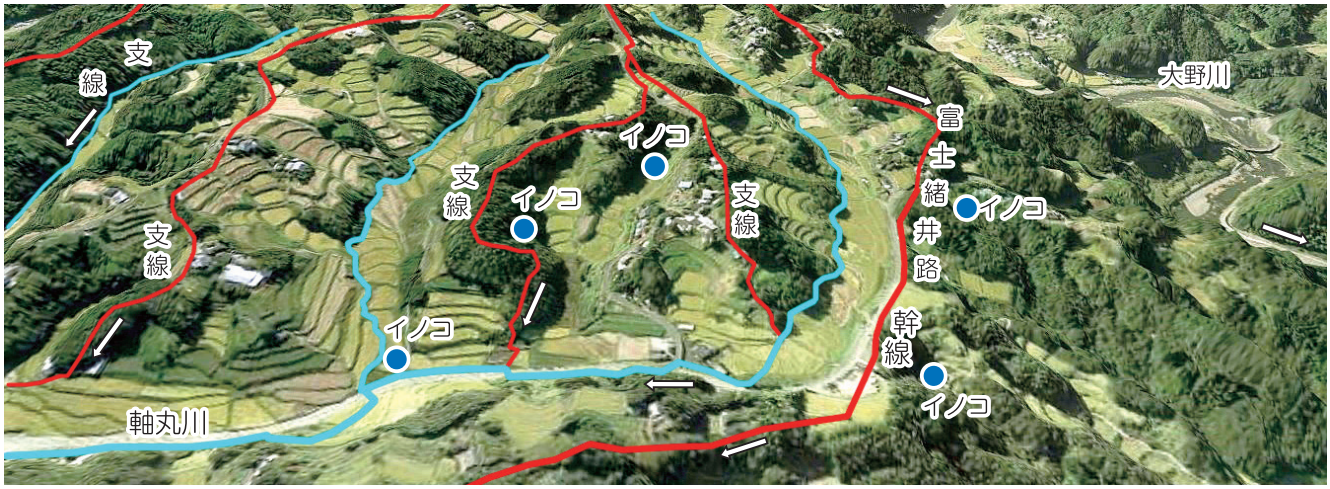


図6　尾根筋を通る富士緒井路と緩斜面に形成された軸丸棚田(国土地理院3D写真使用)

緩やかな傾斜に造られた軸丸棚田

凝灰岩の井路トンネル

凹地の山際に湧くイノコ

3　緒方川流域の歴史の概要

【原始～古墳時代】

緒方川の北側丘陵上では、発掘調査で旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の突帯文土器、弥生時代の住居跡などが発見され、丘陵地を生活の場とした人々がいたことがわかりました。緒方川の南側丘陵上では横穴墓が多く営まれ、古墳時代の直刀や轡などの武器や馬具が発見され、緒方川流域には有力な豪族がいたことを示しています。

【古代～中世】

古代には緒方川流域は宇佐八幡宮の荘園となり、平安末期には荘司である緒方三郎惟栄により統治されました。惟栄は豊後武士団大神一族の棟梁として源平合戦では源氏に味方して、緒方盆地内での井路

開発や宇佐八幡宮勧請による緒方三社の建立、緒方宮迫東石仏・西石仏の造立など、現在に繋がる文化の礎を築いたと考えられています。惟栄が源頼朝により豊後国を追放されたのち、大友氏による支配が始まります。緒方川右岸の久土知地区には文明年間（1469～1487）に緒方荘政所が置かれ、大友宗麟の時代まで緒方川流域統治の中心的な役割を果たしました。

【中世～近世】

安土桃山時代、豊臣秀吉によって大友氏が豊後国から除国されると、緒方川流域を含む豊後国大野・直入郡の大半は、岡藩主中川氏が支配するようになりました。正保２年(1645)の原尻上井路（原尻古井路の原型水路）の開削を端緒に、三代藩主中川久清の時代〔寛文年間（1661～1673）〕に緒方上井路が開削され、江戸時代を通じて緒方盆地全域を潤す井路群が整備されたことで、緒方川流域は岡藩屈指の稲作地帯となりました。

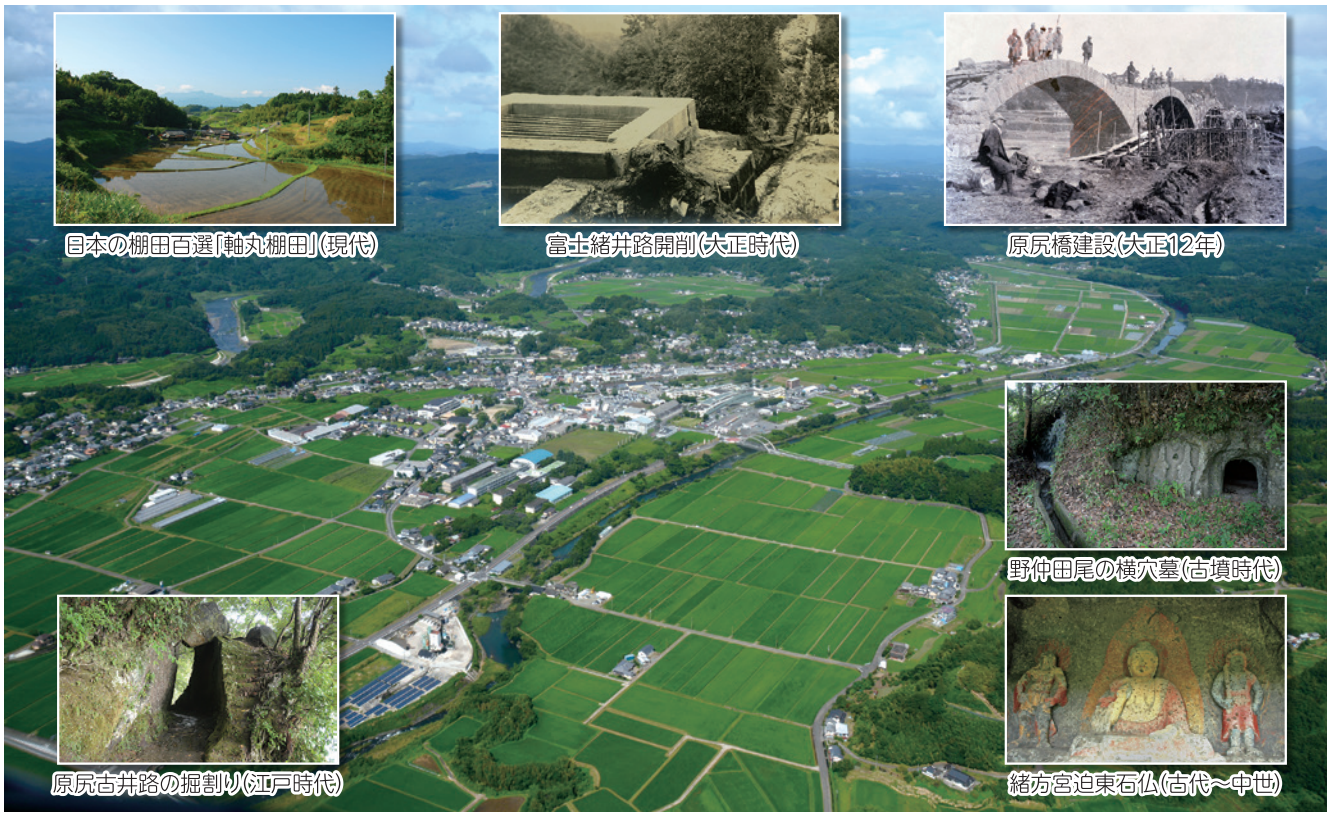
【近現代】

明治以降、土木技術の発達に伴い、大野川・緒方川上流域を水源とする明正井路、富士緒井路などの長距離井路が丘陵上に開削され、緒方盆地の南北にある丘陵地帯に棚田が形成されました。また、大正11年(1922)に豊肥線緒方駅が開業したことをきっかけに、緒方川に３基の多連アーチ式石橋が建設され、道路交通網が発達しました。緒方駅周辺の馬場地区には商店街が形成され、現在の緒方町の中心地となりました。

以上のように、人々は阿蘇火山の噴火によって形成された火砕流の大地に、緒方川が形成した大地を生活の場としてきました。広い平地を成す両岸の段丘上には、水量豊かな緒方川から水を引き、水田を拓いてきました。農業土木技術の発展により、井路を増やす中では、緒方川沿いだけではなく、周辺の丘陵地にも水田が広がり、独特な棚田の景観が形づくられました。

緒方川流域の景観は、長い時間をかけて井路の開削を行い、水田を広げてきた人々の生活や文化を伝える「水と石が織りなす農村景観」とも呼ぶべき文化的景観なのです。

五穀豊穣を願う緒方三社川越し祭り（11月）



緒方盆地の中心地を望む〔下自在～馬場地区〕（現代）

4 緒方川流域の文化的景観の特徴

緒方川流域の文化的景観では、緒方盆地の水田景観、軸丸棚田の棚田景観、緒方駅周辺の市街地景観の３つの景観のまとまりが、それぞれの魅力を見せつつ、地質の特徴を表す滝や断崖、水と深く関わる寺社や石仏、井路の開発を記した石碑、近代の発展を象徴する石橋等と一体となって、地域の歴史や文化を伝えています。以下に、緒方盆地、軸丸棚田の景観の特徴と、その中で継承される暮らしの文化を紹介します。

1. 緒方盆地の景観の特徴

【奥行きのある眺め】

下の写真は、緒方川沿いの国道 502 号から井上（いのうえ）地区の方向を見た眺めです。近景に水田、遠景に井路沿いの集落、その背後に里山があります。里山の上には空が広がり、奥行きのある眺めを描き出しています。

【山際に立ち並ぶ民家と井路】

緒方盆地では、長淵（ながぶち）井路・緒方上井路・三区（野仲）井路などの新しい井路が山際に引かれ、これより下方の古い井路と水路網を築きながら、河岸段丘いっぱいに広がる水田を潤しています。民家は、山際の井路の山側を中心に敷地を並べ、瀟洒（しょうしゃ）な石橋等を井路にかけています。できるだけ高い位置に水を引いて水田を広げようとしてきた人々の営みが、奥行きのある眺めをつくりあげてきました（図７）。

写真の右側から、水田・道路・井路・家並み・里山と連なる風景が展開します（上自在地区）。

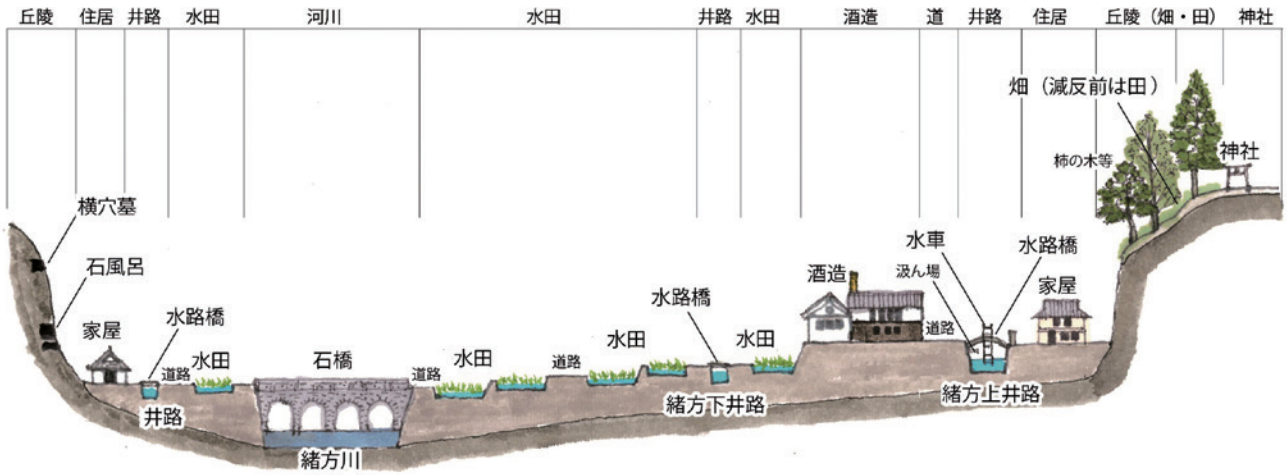


図7　緒方盆地の断面模式図

【緒方三社川越し祭りと原尻の滝周辺の眺め】

原尻の滝では、緒方川右岸にある一宮・二宮八幡社の祭神と、滝から北東約1.3kmの地点にある三宮八幡社（緒方川左岸）の祭神が出会う緒方三社川越し祭りが行われます。この祭りは、滝上から取水する井路に感謝し、五穀豊穣を願う祭りと言われています。緒方三社や滝上流にある井路の堰堤（えんてい）、川中にある大きな鳥居は、緒方川の地形と水を利用し農業を営む人々が形づくった景観です。

【町の中心地として発達した緒方駅周辺の眺め】

大正11年（1922）の豊肥線鉄道緒方駅開業以降、馬場地区は物資輸送の拠点となり、駅の北東側に商店街が発達しました。昭和７年（1932）に緒方村・南緒方村が合併し、昭和10年（1935）には合併の象徴とも言うべき緒方尋常高等小学校校舎が、駅から西の広大な圃場内に建設されました。昭和30年（1955）に、緒方町・長谷川村・上緒方村・小富士村が合併し、新緒方町発足の象徴として町役場が圃場内に新築されました。これ以降、役場周辺には中学校・高校・農協・商店などが建設され市街地化が加速し、緒方町の中心地となっています。

2. 軸丸棚田の景観の特徴

【古田（こた）と新田（しんた）が織りなす棚田の眺め】

軸丸地区の棚田は、古くから軸丸川により灌漑（かんがい）される水田（写真上）と、大正３年(1914)以降に富士緒（ふじお）井路により灌漑される水田（写真下）で構成されます。富士緒井路通水後、緩やかな傾斜にできた水田を「新田（しんた）」と呼び、それまでにあった軸丸川沿いの水田を「古田（こた）」と呼んでいます。「新田」の水源となった富士緒井路の取水口は、軸丸地区から約15kmも上流の大野川に設けられています。軸丸棚田は、軸丸川沿いの「古田」と、緩やかな丘陵の斜面に造られた「新田」の織りなす景観が大きな特徴となっています。図８は、軸丸棚田の断面模式図で、尾根上を流れる富士緒井路と新田、軸丸川沿いの古田、緩斜面（かんしゃめん）に建てられた家屋などの位置関係を示しています。

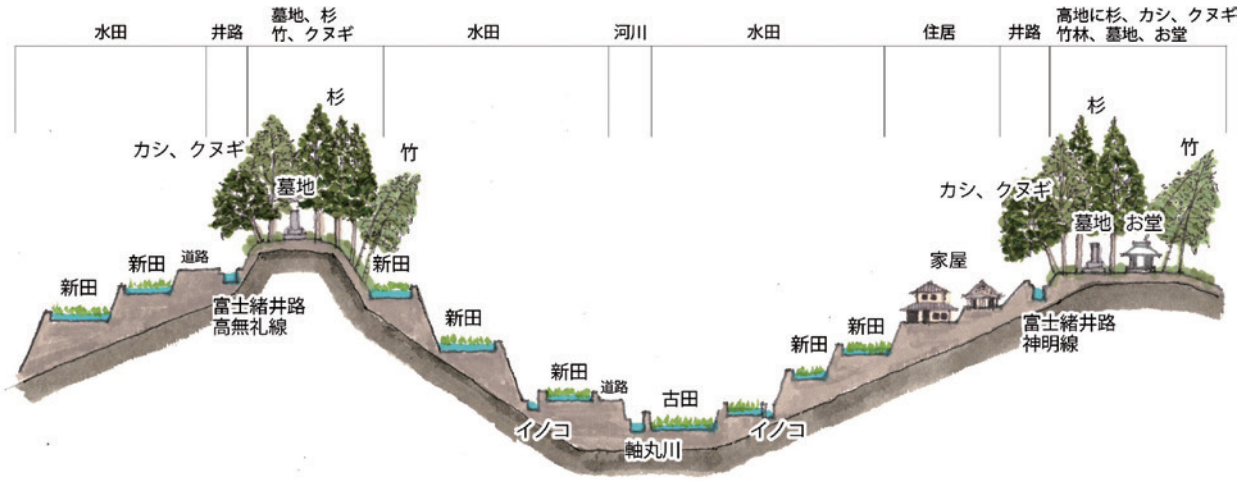


図8 軸丸棚田の断面模式図

3. 井路と暮らしの風景

井路を維持・管理するため、人々は毎年協力しあって井路普請を行います。井路には汲ん場（水汲み場）が設けられ、農機具を洗ったり、庭木に水を撒いたりすることに利用されています。また、井路は防火用水の役割も果たしており、人々の日常生活にとってなくてはならない存在となっています。

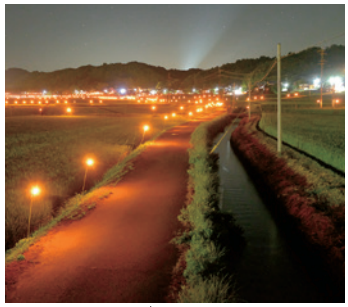
農機具洗い（緒方上井路：上自在地区）

井路普請（緒方上井路：下自在地区）

井路の蓋掛け（富士緒井路：軸丸地区）

4. 今も継承される民俗芸能や行事

人々は五穀豊穣を願うため、お盆には虫おい行事のコダイ（小松明）を行います。9月の緒方五千石祭では神楽・獅子舞・白熊・千盆搗が奉納されます。千盆搗は井路普請の赤土練りの動作と唄が民俗芸能となったもので、大分県の選択無形民俗文化財となっています。11月には、井路に感謝する祭礼緒方三社川越し祭りが行われます。辻河原石風呂は、緒方川流域に集中して分布する蒸し風呂のひとつで、今でも地元の人々の憩いの行事となっています。昔ながらの農作業風景は、農業を生業とした後藤絹さんにより紙粘土人形で再現され、往時を偲ばせています。


コダイ（8月）

緒方五千石祭での神楽奉納（9月）

緒方五千石祭での千盆搗（9月）

緒方三社川越し祭り（11月）

辻河原石風呂

昔の農村風景を今に伝える後藤絹さんによる人形

5 景観を形づくる井路群と三段階の開発

緒方川流域の文化的景観形成には、井路群の開削とその段階的な発達が大きな影響を及ぼしています。景観は、大きく分けて「室町時代以前」、「江戸時代」、「明治時代以降」の三段階の開発によって形づくられました。以下に、現在の井路群の分布と三段階の発達の過程をみていきましょう。

補完し合う緒方川流域の井路群

井路群の三段階の開発
- ①室町時代以前の開発
- ②江戸時代の開発
- ③明治時代以降の開発

1. 補完し合う緒方川流域の井路群

緒方川に流入する大久保（黒土甲）川、軸丸川などの小河川は、古代より緒方盆地の水田開発にとって欠かせない水源でした。平安末期には、緒方川本流にある原尻の滝上流に大規模な井路の取水口が設けられ、開削された井路は大久保川・軸丸川の水を取り込み、主に馬場・井上・野尻地区の水田を潤しました。この井路は、現在では緒方下井路と呼ばれています。近世になり、緒方下井路取水口のさらに上流域から取水する緒方上井路・三区（野仲）井路などが丘陵際に開削され、緒方盆地の大部分が水田化しました。

水田化に伴って、民家は岡藩の主導により丘陵際に移転させられ、井路沿いに民家が立ち並ぶ現在の景観ができあがりました。そして近代になり、大野川や緒方川上流域を水源とする長淵井路、明正井路、柚木井路、原尻新井路、富士緒井路などの長距離井路が丘陵上に開削され、これにより緒方盆地南北の丘陵に棚田が形成されました。これら近代に開削された井路の水は、棚田を潤した後、余すことなく緒方盆地内の緒方上・下井路、三区（野仲）井路に取り込まれ、広大な盆地全体を潤す水源としても重要な位置を占めるようになっています。現在、緒方川左岸では5本、右岸では10本もの井路群（図9）が補水関係を保っており、6月になると緒方盆地と周辺の丘陵地帯では一斉に田植が始まる水田景観を見ることができます。

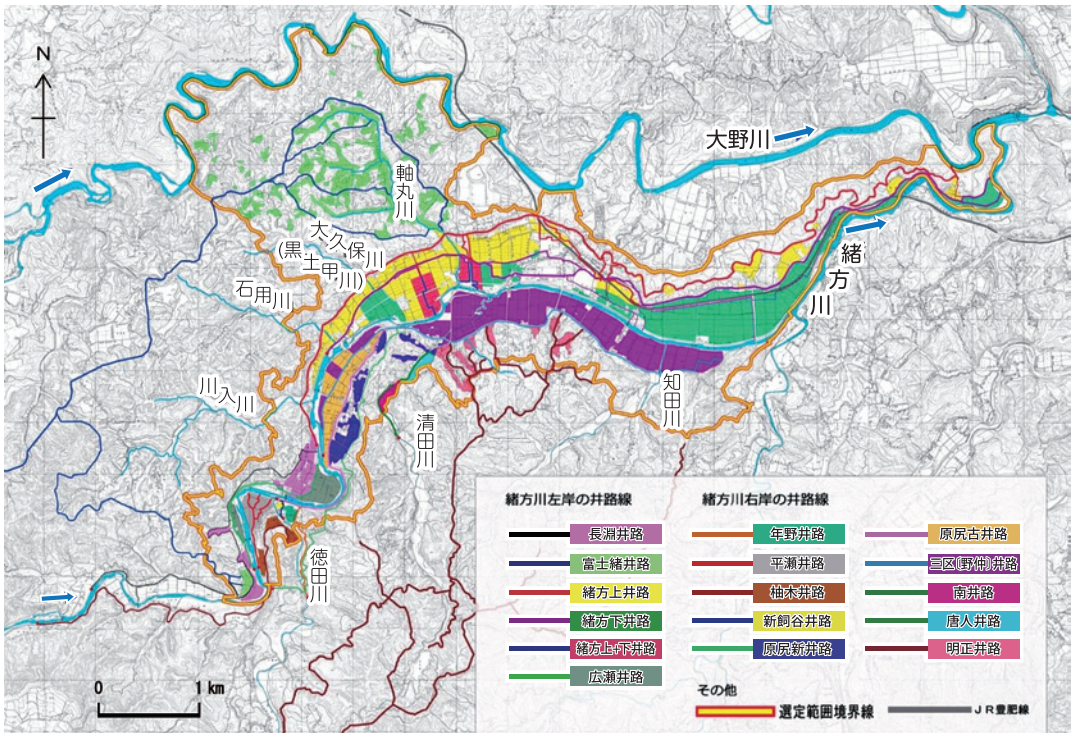


図9　15本の井路群と灌漑される圃場

井路とは？ ～遠くまで水を届ける長距離井路の仕組み～

灌漑用水路は江戸時代には「井手」と呼ばれていましたが、明治以降に「井路」と呼ぶようになりました。

井路の水源は、大野川や緒方川などの河川です。豊後大野市の西部にあたる緒方盆地周辺には多くの河川が流れていますが、河川は長年の侵食作用により深い谷底を流れる場所が多いのです。そのため、稲作に適した場所があるにも関わらず引水が困難で、容易に水田を開拓することができませんでした。明治時代以降の土木技術の発達により、大野川や緒方川の上流域から長距離井路を開削し、台地上に引水し水田をつくることができるようになりました。軸丸棚田を潤す富士緒井路は、大野川上流域を水源とし、取水口から末流まで総延長が約15kmにも及びます。

長距離井路を開削するには、①井路の堰堤を河川内に築く、②山を貫く導水トンネルを掘る、③導水が谷を渡る水路橋を築く、④サイフォンを埋設し高所へ水を送る、などの土木工事が必要になります。

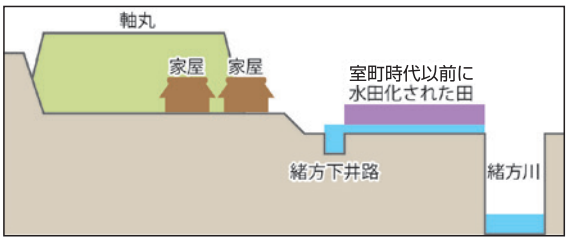
右の図は、水路橋やサイフォンを利用した長距離井路の仕組みを説明したものです。

2. 井路群の三段階の開発

【室町時代以前の開発　～緒方三郎惟栄と井路開発～】

緒方盆地には石用川、大久保（黒土甲）川、軸丸川が流入しており、これらは緒方川左岸地域を潤す重要な河川でした。特に軸丸川は広大な緒方川下流域の水田を潤す主要な河川であり、軸丸川を水源とした井路が上自在・下自在・馬場・井上・野尻地区を潤していました。水源地である軸丸地区には熊野社があり、釈迦堂と呼ばれる堂宇に木造の如来型坐像・不動明王坐像が安置されていました。これは、緒方荘の荘司である緒方氏が水源を守る仏として安置したといわれています。平安末期になり、緒方三郎惟栄が原尻の滝上を取水口とする新たな井路を設け、深町放水門で軸丸川と合流させ、緒方盆地左岸を潤す主要な井路が完成したと考えられています。これが後に緒方下井路の原型水路となりました。惟栄は文化面でも影響を残しており、井路と領地を守るため、緒方三社（一宮・二宮・三宮八幡社）を建立したとされ、三社の奥の院には、緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏を造り、源平の争いによる乱世において戦勝と緒方一族・人々の安寧を願ったと思われます。

室町時代以前の井路･水田･家屋の関係図



(図10の解説)

・軸丸川・大久保（黒土甲）川などを水源とし、緒方下井路により緒方盆地左岸の低地の一部が水田化されました。

・家屋は緒方下井路沿いに建てられていました。

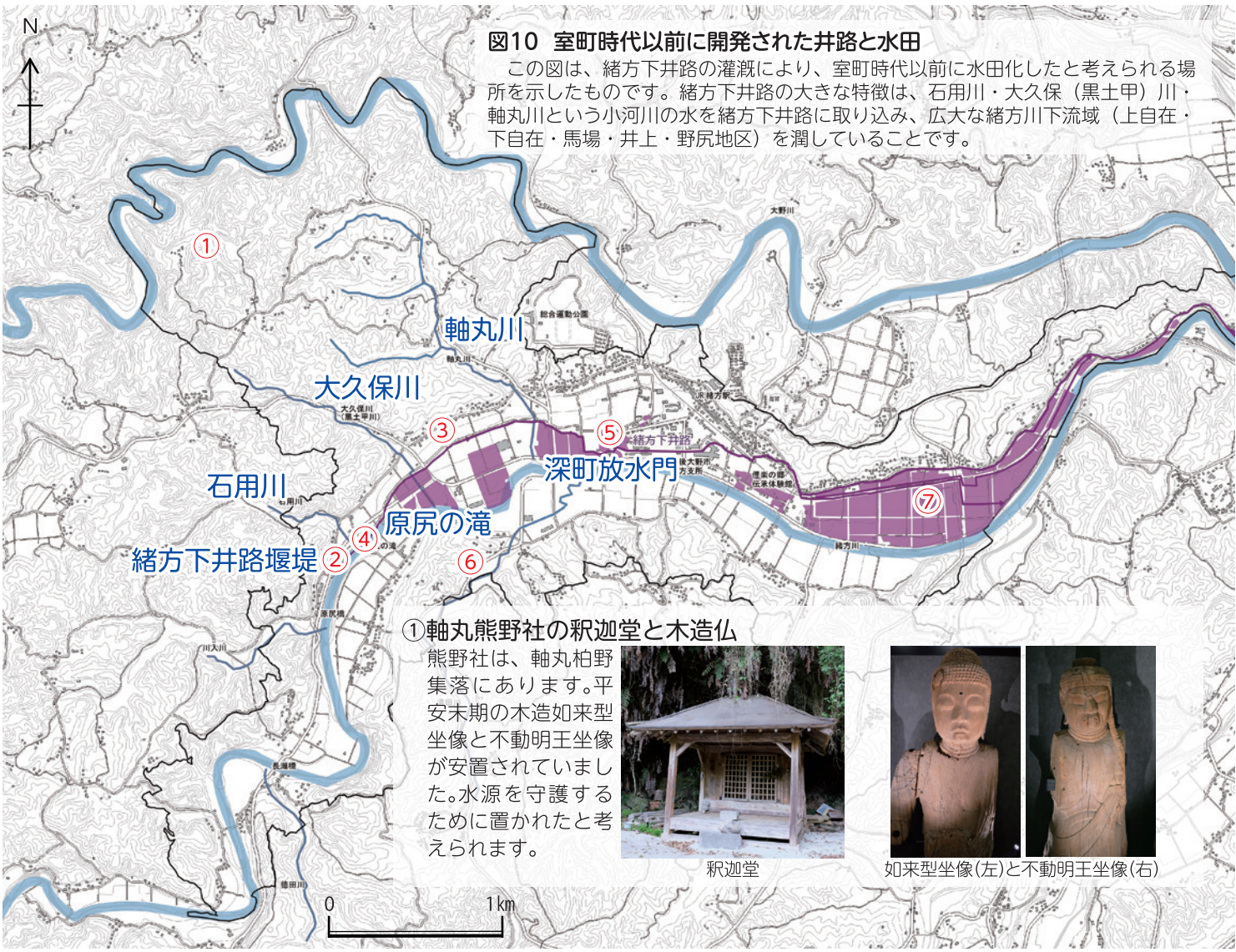


図10　室町時代以前に開発された井路と水田

この図は、緒方下井路の灌漑により、室町時代以前に水田化したと考えられる場所を示したものです。緒方下井路の大きな特徴は、石用川・大久保（黒土甲）川・軸丸川という小河川の水を緒方下井路に取り込み、広大な緒方川下流域（上自在・下自在・馬場・井上・野尻地区）を潤していることです。

①軸丸熊野社の釈迦堂と木造仏

熊野社は、軸丸柏野集落にあります。平安末期の木造如来型坐像と不動明王坐像が安置されていました。水源を守護するために置かれたと考えられます。

釈迦堂

如来型坐像(左)と不動明王坐像(右)

水と石が織りなす農村景観

緒方荘を支配した緒方氏は、祖母山（姥岳）に棲む大蛇の末裔であるという伝説を持ち、緒方三郎惟栄は源平合戦では源氏方につき平家追討に大きな威力を発揮したと伝えられます。緒方氏は、緒方の井路開発のみならず、磨崖仏造立や緒方三社建立を行ったなどの伝説が今に伝えられています。

②緒方下井路堰堤と原尻の滝

緒方下井路堰堤は原尻の滝上に築かれ、緒方川の左岸域を潤す緒方下井路の取水口となっています。緒方三郎惟栄の開削と考えられ、滝周辺は、惟栄の慰霊と緒方井路に感謝する祭礼「緒方三社川越し祭り」の舞台となっています。

③三反畑板碑

三反畑板碑は、天授 3 年（1377）に建立されたものです。三反畑という名前からこの地が古くは畑であったことを示す貴重な板碑です。惟栄が投げて刺さったという伝説があります。

④原尻の滝と緒方三社川越し祭り

源義経に味方した惟栄は、源頼朝の怒りを買い豊後国から追放されます。後に入部した大友氏は、緒方で続いた災害を鎮めるため、緒方三社の祭神が出会う「緒方三社川越し祭り」を原尻の滝周辺で始めたと伝えられています。

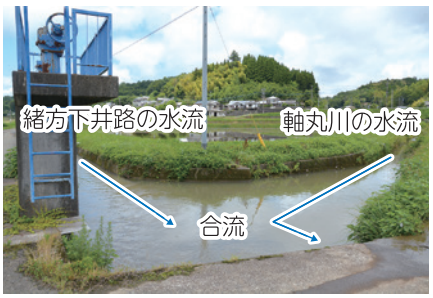
二宮八幡社

川を渡る三宮八幡社の神輿

一宮八幡社

⑤深町放水門(軸丸川と緒方下井路の合流地点)

緒方下井路は、深町放水門で軸丸川の水を余すことなく取り込み、緒方川左岸の盆地の圃場を潤しています。



⑥緒方宮迫東石仏・緒方宮迫西石仏

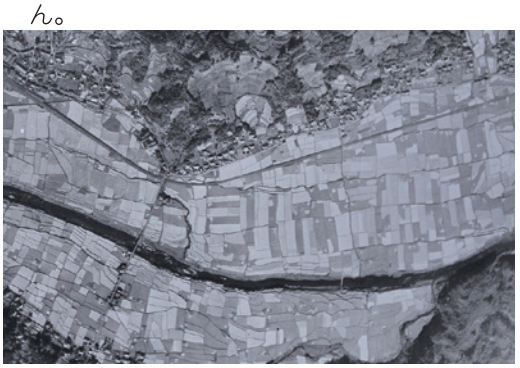
平安末期に緒方氏が造立したと考えられています。

緒方宮迫東石仏

緒方宮迫西石仏

⑦井上地区の条里型地割

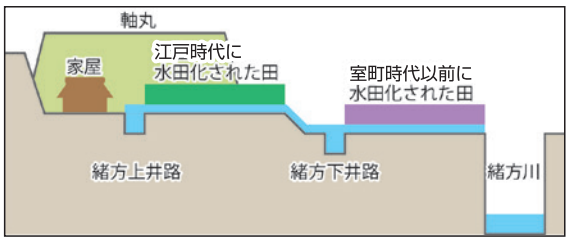
昭和23年（1948）の井上地区の空中写真には、条里型地割が確認されます。古代に、軸丸川の水を利用した条里水田が形成されたと考えられています。この地割は圃場整備により、今では見ることができません。


国土地理院蔵(アメリカ軍撮影)

【江戸時代の開発　～岡藩主中川氏と緒方五千石の誕生～】

豊臣秀吉の九州平定後、大友宗麟の子義統が文禄の役での失態を理由に豊後国を除国されました。その後、秀吉配下の大名や代官が豊後国内に配置されたことで、豊後国には小藩が分立し、大野・直入郡の大半は中川氏の所領となりました。山地が多い岡藩にとって重要な穀倉地帯である緒方盆地では、正保２年（1645）に原尻上井路が、承応元年（1652）には原尻下井路が造られ、緒方川右岸地域を潤すようになりました。現在の原尻古井路や三区（野仲）井路の原型水路と考えられています。近世には、凝灰岩の岩盤に水路を通す掘割工事や山を穿つトンネル工事の技術が発達し、寛文元年（1661）に緒方上井路工事が着手され、寛文11年（1671）には最末流の野尻地区まで通水し、緒方川左岸の緒方盆地底と丘陵地の一部に水田が開かれました。寛文年間(1661～1673)には、上年野平瀬集落を潤す平瀬井路も開削されたと推定されます。緒方上井路や野仲井路の開削と同時に、岡藩主導で平坦地にあった民家は山際の井路沿いに移転させられ、現在の井路沿いに民家が立ち並ぶ農村景観が完成しました。さらに、緒方盆地西端の緒方川の上流から、文化年間(1804～1818)に長淵井路が、文久３年（1863）に広瀬井路が引かれるようになり、緒方川の右岸・左岸に長大な井路が完成しました。岡藩屈指の稲作地帯として開発が進んだ緒方盆地は、「緒方五千石」と称され、しばしば岡藩主が田植を見物する御覧田植が行われました。

江戸時代の井路･水田･家屋の関係図



(図11の解説)

・江戸時代前期、緒方上井路の完成により、民家は山際の上井路沿いに移転しました。

・江戸時代後期、緒方盆地南西端の牧原・上年野・辻地区が水田化し、緒方盆地の大部分が水田化しました。

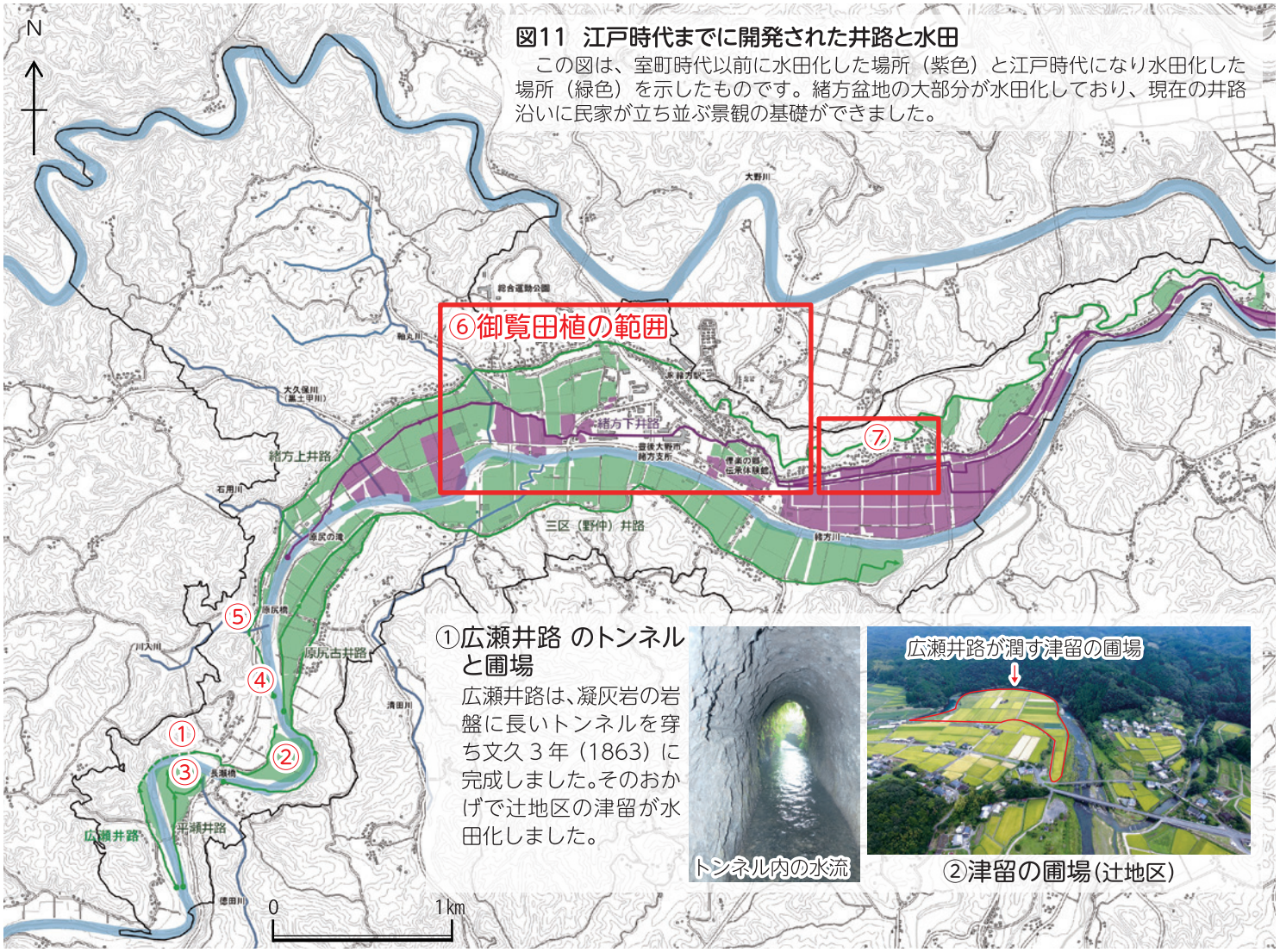


図11　江戸時代までに開発された井路と水田

この図は、室町時代以前に水田化した場所（紫色）と江戸時代になり水田化した場所（緑色）を示したものです。緒方盆地の大部分が水田化しており、現在の井路沿いに民家が立ち並ぶ景観の基礎ができました。

①広瀬井路 のトンネルと圃場

広瀬井路は、凝灰岩の岩盤に長いトンネルを穿ち文久３年（1863）に完成しました。そのおかげで辻地区の津留が水田化しました。

トンネル内の水流

広瀬井路が潤す津留の圃場

②津留の圃場(辻地区)

水と石が織りなす農村景観

③平瀬井路の圃場

平瀬井路の開削年は寛文年間(1661～1673)と推定されます。明治21年(1888)の字図と現在の圃場の形を比較しても、ほとんど変化がありません。おそらく江戸時代の圃場の形が残っていると考えられ、圃場整備が進んだ緒方盆地の中で、古い時代の圃場の形を維持しており、大変貴重な景観です。

④緒方上井路の磨崖仏

弘化２年（1845）の緒方上井路の改良工事記念碑「石割碑」に、「願王尊を一躯安置奉る」とあります。水路を守護する願いを込めて彫られたと考えられます。

⑤緒方上井路の石割碑

地獄水門の側にある弘化２年（1845）の緒方上井路の改良工事記念碑です。岡藩の井路工事関係者の名や、井路工事の概要が記された貴重な記念碑です。

石割碑と石造の地獄水門

⑥若殿様御覧田植の絵図面

安政６年（1859）に行われた御覧田植の絵図面で、緒方上・下井路や三宮八幡社、井路沿いに立ち並ぶ民家などが描かれています。岡藩主が緒方盆地を重用したことが分る貴重な図面です。

「安政六未年五月廿六日
若殿様下自在馬場村境
御覧田植絵図面是也」
（個人蔵）

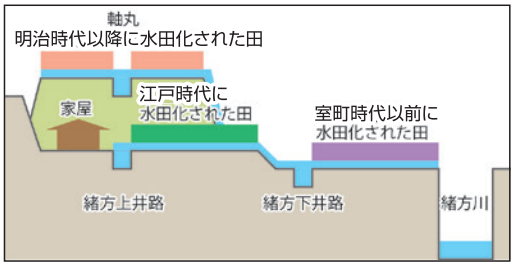
⑦丘陵地沿いに立ち並ぶ民家と背後の里山（井上地区）

【明治時代以降の開発　～道路交通網・農業水利の近代化～】

近代化が進むにつれて、土木技術の発達により長距離トンネルの開削・橋梁架設・サイフォン設置等が可能となり、大野川・緒方川の上流地域から緒方盆地周辺の丘陵地帯まで長距離井路が引かれ、標高が高い場所に棚田が形成されました。年野井路（明治15年竣工）・原尻新井路（明治33年竣工）・富士緒井路（大正３年竣工）・明正井路（大正13年竣工）等が通水した地域では、畑作から稲作への転換が行われました。緒方上井路の小河川を越す部分では、明治になり木造架樋から強固な石造架樋に架け替える工事が行われました。

大正11年(1922)、緒方村に豊肥線緒方駅が開業したことにより、近隣の村々は迅速な交通手段の確保のため、堅牢なアーチ式石橋を緒方川に架け、速やかな物資運搬をめざしました。鳴瀧橋（大正11年）、原尻橋（大正12年）、長瀬橋（大正12年）と次々に多連アーチ式石橋が建造され、駅が開業した緒方村馬場地区は、緒方村及び近隣七ヵ村の物資集散の中心地となり、昭和25年(1950)の緒方町成立、昭和30年(1955)の近隣町村との合併以降、緒方町域の中心街となり発達してきました。

現在の井路･水田･家屋の関係図



(図12の解説)

- 長距離トンネルの開削・橋梁架設・サイフォンの設置により、標高が高い丘陵地帯に棚田が営まれるようになりました。
- 富士緒井路により灌漑される軸丸地区は、平成11年（1999）に「日本の棚田百選」に選定されました。
- 長距離井路の末流は、近世以前に開削された緒方盆地の井路に流れ込み、補完水としての機能を持っています。

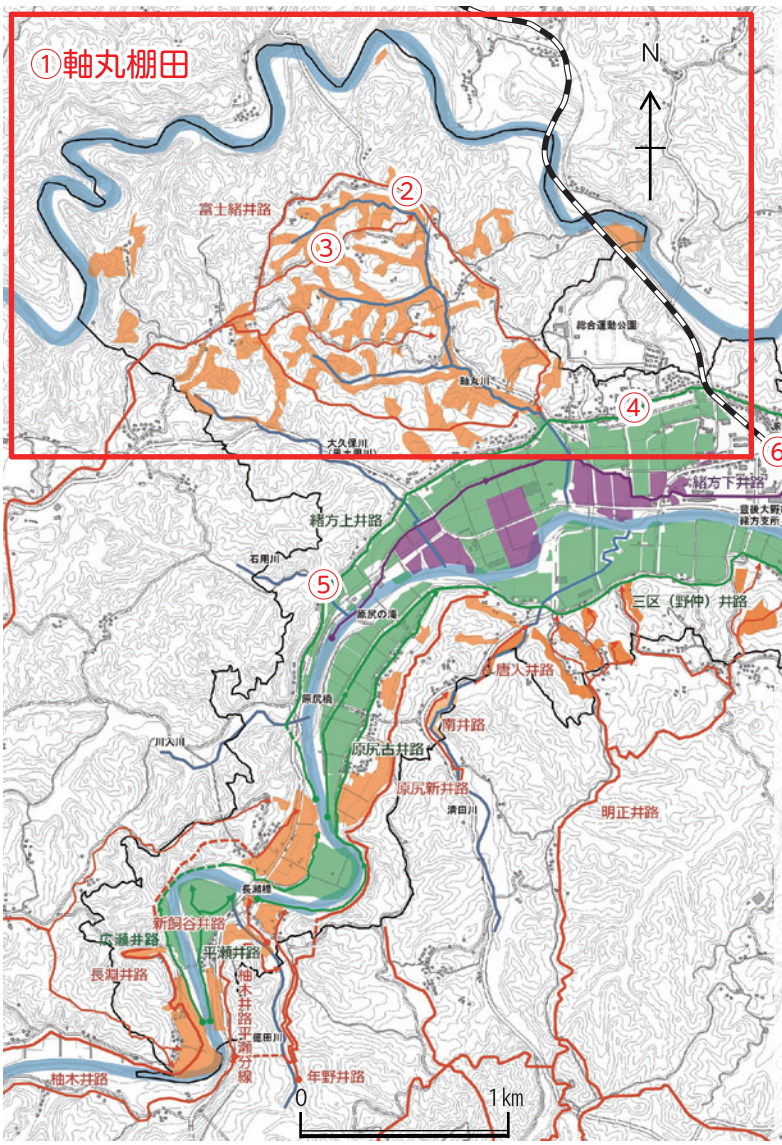


図12　現在の井路と水田

この図は、現在の水田を示したもので、明治時代以降に水田化した場所には黄土色で着色しました。明治時代以降、緒方盆地の南北に広がる丘陵地帯が水田化したことを示しています。

④灌漑用水車(緒方上井路)

緒方上井路に架かる灌漑用水車で、汲み上げた水は46m離れた水田まで地中のサイフォンを通じて運ばれます。

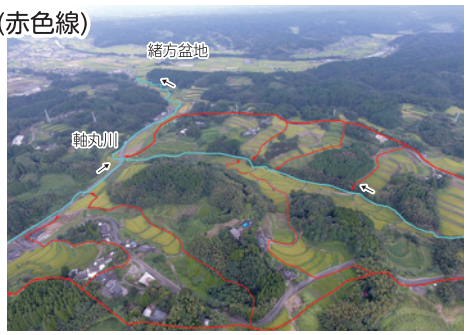
⑤石用川を越す石樋
(緒方上井路)

明治21年(1888)に石用川を越す木造架樋を石造架樋に造り替えました。側にある記念碑には、堅牢な石造架樋ができたことで井路維持工事の煩雑さから解放されたことが記されています。

水と石が織りなす農村景観

①軸丸棚田と富士緒井路(赤色線)

大野川上流から引かれる富士緒井路の用水は、棚田を潤した後、軸丸川に流れ込みます。軸丸川の水は緒方下井路に流れ込み、緒方盆地左岸の圃場を潤します。井路同士が補完し合いながら緒方川流域の水田を潤しています。



②富士緒井路のサイフォン

水路橋を架けることができない谷地は、サイフォン管を埋設し再び高所へ水を届けました。起伏に富んだ軸丸地区には、至る所にサイフォンが造られています。

③富士緒井路のトンネル

富士緒井路の幹線は7割がトンネルです。その支線も各地にトンネルが穿たれ棚田を潤しています。右の写真は高無礼線と代線がトンネル内で枝分かれしたものです。

⑥緒方駅の開業を祝う人々(緒方町馬場線)

大正11年(1922)の豊肥線緒方駅の開業祝賀式の様子。緒方村ほか七ヵ村から2万人を超す人々が集い、当時の新聞には「緒方郷八ヵ村、ハメを外して大賑わい」と報道されるほどの盛況でした。

⑦鳴瀧橋(緒方町馬場～知田)

鳴瀧橋は、大正11年の緒方駅開業に伴い建設されました。鳴瀧橋碑には、「車馬連絡を謀るは焦眉の急に迫れり」と、交通事情の改善の重要性を訴えています。

6 緒方川流域の文化的景観の本質的価値

緒方川流域では、阿蘇火山噴火の火砕流が積もった谷筋に、広い河岸段丘を持つ緒方盆地が形成されました。盆地周辺の丘陵地では、侵食による緩い凹地の発達した斜面が軸丸川に面して形成されました。

盆地では段階的に井路を高所に引いて井路網を発達させ、集落を山際に移して水田が広げられました。丘陵地では遠くから尾根沿いに井路を引き、谷筋の古田と山腹の新田が混じる棚田景観が築かれました。どちらの地区にも水と関係の深い社寺や摩崖仏等が祀られ、伝統的な祭礼や民俗行事が継承されています。盆地の一画には近代に鉄道駅が置かれて市街地化し、周辺に道と石橋の発展をもたらしました。

阿蘇火山の大地と豊富な水資源を巧みに利用して形成されてきたこの景観は、地域の水と石の文化を表す大切な文化的景観です（図13）。

文化的景観における景観特性のまとめ

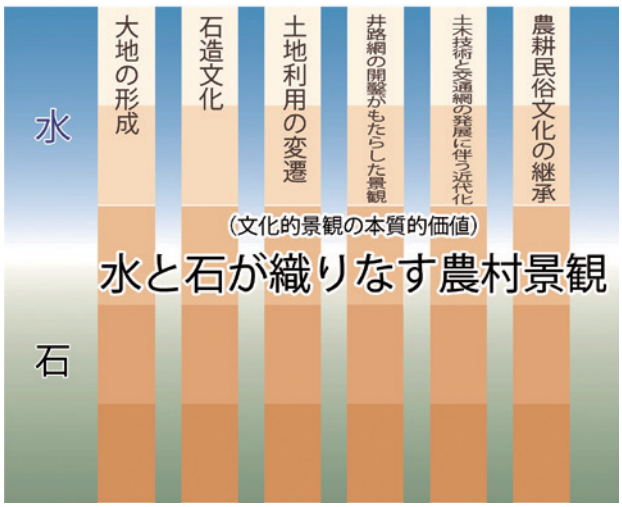


図13　緒方川流域の景観特性を示した図

これまでの取り組み

緒方川流域に形成された緒方盆地とその周辺地域では、古代から近代にかけて多数の井路網が開削されました。盆地内には広大な水田が、そして周辺の丘陵地帯には美しい棚田の景観が広がっていることから、これまで「美しい日本のむら百選」「日本の棚田百選」「日本疏水（そすい）百選」に選定されてきました。また緒方盆地のある豊後大野市は、平成25年(2013)には日本ジオパークに加盟認定、平成29年(2017)にはユネスコエコパークに登録されています。このすばらしい景観は、長い年月を経て「地域の人々の生活・生業・風土」により形成されたものです。その成り立ちを調査・研究することにより、文化的景観としての価値を明らかにし、環境保全・歴史遺産の保護・活用を図る第一歩とすべく、平成27(2015)年度に文化的景観保護推進事業に着手しました。

この概要版は、着手時から令和3年(2021)までの調査・研究の成果をまとめたものです。

年次	環境保護活動／景観行政	文化財保護行政
平成 3年(1991)	美しい日本のむら百選（上自在地区）	
平成11年(1999)	日本の棚田百選（軸丸地区）	
平成17年(2005)	日本疏水百選（緒方井路）	国の重要文化的景観制度の施行
平成20年(2008)		「小鹿田焼の里」、重要文化的景観選定
平成22年(2010)		「田染荘小崎の農村景観」、重要文化的景観選定
平成24年(2012)		「別府の湯けむり・温泉地景観」、重要文化的景観選定
平成25年(2013)	日本ジオパーク加盟認定	
平成27年(2015)	豊後大野市景観条例・景観計画策定に着手	豊後大野市文化的景観保護推進事業着手
平成29年(2017)	祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク登録	
平成30年(2018)	豊後大野市景観計画説明会実施	
令和元年(2019)	豊後大野市景観条例・景観計画施行	
令和 3年(2021)		「瀬戸内海姫島の海村景観」、重要文化的景観選定
令和 3年(2021)	緒方川の多連アーチ石橋群 日本土木学会推奨遺産認定	豊後大野市文化的景観保護推進事業調査報告書刊行

●文化的景観とは

「文化的景観」とは、文化財保護法に「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と規定され、文化財の一部として位置づけられています。国は、市町村等により保護が図られたもののうち、特に重要なものを「重要文化的景観」として選定します。大分県内では、現在４ヵ所が選定されています。

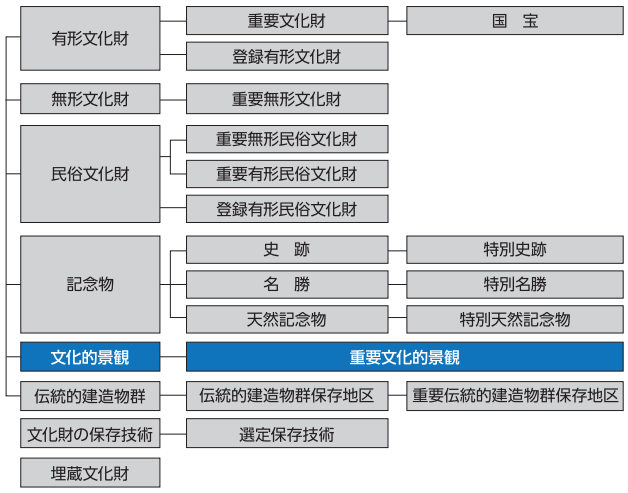
〔大分県内の重要文化的景観〕

別府の湯けむり・温泉地景観
（大分県別府市）

田染荘小崎の農村景観
（大分県豊後高田市）

瀬戸内海姫島の海村景観
（大分県姫島村）

小鹿田焼の里（大分県日田市）



「大分県豊後大野市文化的景観保護推進事業調査報告書概要版」（令和4年3月）
〔発行〕豊後大野市教育委員会　社会教育課文化財係　　〒879-7125　豊後大野市三重町内田881番地　豊後大野市資料館
電話0974-24-0040　／メール bo260060@city.bungoono.lg.jp

※この事業は、文化庁の補助を受けて実施しています。